

論語教室だより

『寺子屋・こども論語塾』世話人会

第 85 号

2018 (平成30)年4月21日(土)

『求道者、情熱、真摯』

寺子屋・こども論語塾 主宰 新田 修

いよいよ新学期がスタートしました。塾生・保護者の皆様は気持ちを切り替え、心新たにそれぞれの目標に向かってスタートしたことと思います。特に塾生のみなは、孔子が弟子に語った「巧言令色、鮮な仁」を重く受け止め、口先だけの人ではなく、思いやりのある人を新しい友達に選ぶよう努力してほしいと思います。

さて韓国の平昌で開催された冬季オリンピック大会は、日本が金 4、銀 5、銅 4 と史上最多 13 個のメダルを獲得して終了しました。私達に数々の勇気と感動を与えてくれましたが、あれから早 2ヶ月が過ぎようとしています。テレビの前でハラハラドキドキしながら感動の余り何度涙を流したことでしょう。

冒頭の言葉は、スピードスケート女子 500メートルで金メダルを獲得した小平奈緒選手(31歳)に記者が発した「アスリートとして自分自身を表現する言葉を 3つ教えてほしい」との質問に彼女が口にした答えですが、とても印象的でしたので取り上げてみました。

「求道者」とは本来、「悟りや真理の道を求めて修行をする人」のことです。転じて「何かに一心不乱に打ち込み、そのスキルを上げることに全力を費やしている人」を言います。

小平奈緒選手は「究極の滑りを目指してその滑りをするために追い求めていくこと」と説明していました。逆境を乗り越えてメダルを手にした選手の言葉だからこそ重みのあるものを感じられました。

私が今回のオリンピックで最も感動したシーンは、小平奈緒選手が 36秒94の五輪新記録を出してゴールした直後、歓喜に沸く観客席の応援団に「シーッ」と人差し指で唇に当てるしぐさをして、続いて滑走する選手らを気遣った場面で、五輪王者としての品格をうかがわせるのに十分なものでした。

とかく今の若者は品格にかけている、とよく言われますが決してそうでないことを実証してくれたことが何より嬉しく思います。

小平奈緒選手はオランダで学んでから急成長したように感じます。

オランダといえば、1964(昭和39)年の東京オリンピックでの柔道のヘーシンク選手を思い出します。

彼は日本で柔道を学び、東京オリンピックの無差別級に出場し、日本代表の神永選手に勝って金メダルを手にし恩返しをしたのです。しかも、勝利の直後ヘーシンクを祝福しようとして一礼の交換前に、オランダのファンが飛び出して駆け寄ろうとした時、ヘーシンクはこれを手で制したシーンもとても印象的でした。彼は日本で礼儀をも学んでいたのです。

礼とか品格は何もスポーツに限ったことではありません。

この論語塾でも、孔子の教えである礼を塾生・保護者の皆さんはしっかり実践しています。

北大寺の本堂に入る際は、「お願いします」と一礼し、帰る時には、「ありがとうございました」と一礼します。トイレのスリッパは、次の人のために履きやすいようにして出ます。先唱役は、積極的に手を上げて前に出てやってくれます。素読する時は、背筋をきちんと伸ばして姿勢を正して大きな声で読みます。最後にテーブルと座布団を全員が協力して片づけてくれます。

当たり前のことをあたり前のこととして実践することの大切さを身に付けてくれているのです。

小平奈緒選手は実践に裏打ちされたその向こうに、人としての温かさと情熱、笑顔と真摯な態度を持っていたからこそ、芸術的な研ぎ澄まされたスケートティングが出来たのだと私は思っています。

改めて「お疲れ様でした」そして「感動をありがとう！」。

【お知らせ】

5月の論語塾で吃音カウンセラーとして30年以上関わっている塾生の幸村秀子さんに、20分程度お話しをしてもらうことになりました。吃音(どもりのこと)は病気や障害でないことをわかりやすく語ってくれます。楽しみにしていてください。